

26 杉本権蔵の開発計画

著 者 岡本 春一

日坂御領林の開拓、開発の第一人者は杉本権蔵である。彼は文政 12 年（1829）金谷宿本町の杉本家の次男として誕生した。幼少期より金谷宿の名家桜井浅右衛門家で働いていた。浅右衛門より厚く信頼を受けていたので経理面も任されていた。江戸へも浅井家の大金を持って往復していた。その間宇津の谷や箱根山の難関も幾度となく歩いていただけに、土地の開発と道路と云うものに一層の関心を持つ様になった。

時代は一変した。江戸時代は大井川川越制度の中で朝、川会所に行き、上り下りの客を運び夕方川会所に行けば給与は間違いなく受取れる。洪水で川留になっても何とか食いつないでいた。特に川留、川明けは大変混雑し金谷の宿は賑わっていた。しかし江戸幕府の崩壊と共に、元和年間（1615～）から続いた川越制度も明治 3 年（1870）廃止に依って明日からの生活の糧をどうするか、完全失業者となった 1200 人の川越人夫を始め旅籠屋、茶屋の町人も宿内は騒然となり大混乱を巻き起こした。

これより先、徳川慶喜は大政奉還をし、駿府への隠居に伴い護衛に当たって来た精鋭隊の隊長中条景昭、副隊長大草高重等は明治 2 年（1869）版籍奉還に依って給与の道を断たれ、新番組と改名する。明治新政府の帰農奨励策により、勝海舟、関口隆吉等の努力に依って明治 2 年 7 月 25 日、中条景昭、大草高重等 250 戸の士族が谷口原、岡田原等に一足早く牧之原開拓に入植する道を取った。

これに対して大井川川越人夫組は転職のあてもなく、自暴自棄の不穏な空気もただよう中で、人夫頭の仲田源蔵は救済事業計画を積極的に進めた。杉本権蔵もこれに強力に応援して、島田郡役所と掛け合うが遅々として進まなかった。陳情の骨子は

① 御維新に付、大井川歩行制度を廃止され、新たに船・橋等便宜な方法を採用する事は当然であるが、川越人夫 1200 人余名その日の生活に窮し餓鬼にひんする者が大部分である。

② 先に川越人夫より願った御林跡、持淵山を払い下げ、人夫に開墾地として入植願いたい。

③ 面積は少ないので、今一つの願いは、今回の渡船の儀一切を川越人夫に任命されたい。と云う主旨であったが、島田郡役所は実情調査をしただけで、仲田源蔵を渡船の金谷方監督に任ずると云う程度で、解決策にはならなかった。

金谷宿を総括していた大庄屋河村玲蔵は元より、川越人夫を総括していた人夫頭の仲田源蔵等は川越人夫の救済事業に献身的努力をして来た。更にこの事業に加わったのが杉本権蔵であった。この様に明治維新で狭い耕地も無い金谷宿の大混乱を救ったのが「金谷の三蔵」と云われた河村玲蔵、仲田源蔵、杉本権蔵の三人であった。

川越人夫頭の仲田源蔵は救済事業を積極的に進め、杉本権蔵も強力に後援して島田郡役所と掛け合うが遅々として進まないの、源蔵は 100 両（田畑を売り 70 両を 30 両は借財して）の大金を懐に明治維新政府民部省駅通司に直訴する。

この運動は漸く効を奏して明治3年（1870）10月5日、開拓の世話役が選任されて、池新田村丸尾文六等がこれに当たり、開拓地の絵図が渡されて、東萩間、西萩間、御林、横地、棚草、丹野の一部が示され、1990両が与えられた。この時調印書には御林分として、

差上候一札之事

一金七百五拾両 但し金谷分日坂御林跡振当分 此人数七五人

明治四年三月 金谷宿 役人 百姓

とある。日坂御林の官林の開拓が許され一応の目途が着いた。前述の通りこの事業の後押しをして惜しみなく活躍したのが42才の男盛りの杉本権蔵であった。

明治4年（1871）仲田源蔵は200人の川越人夫を引連れて萩間等の地域の開拓に入り、杉本権蔵は七五人の川越人夫を引連れて日坂御林の官林200町歩の払い下げの成功に依り開拓に入った。「御林跡開墾会所」を作り、南方の林地に川越人夫の宿舎を建て開拓は本格的に進められた。開拓は杉本権蔵組50%、大塚真平組25%、赤堀啓三組25%の割合で開拓を進めた。

いざ開拓に入ると、人夫達は開拓の困難さと、成功を危ぶみ躊躇する者、金谷宿に戻る者、日坂宿に出る者が続出した。やむなく下賜の1人10両を与えこれを認め、残る人達で一家を挙げ移住して開拓を進めた。中心になった杉本権蔵、大塚新平、赤堀啓三等が中心になって開拓を進めた。数年に1万円の資金を投じて鋭意努力した結果、茶畑14町2反歩、田8反歩の開拓に成功した。

入植地石原久保 （大塚実氏調査）

杉本権蔵、大塚忠助、赤堀啓三、辻伊七（権蔵妻の実家）、

日坂中山裏

進士半三郎、永野長蔵、小田茂八、杉浦源八、杉山佳平、秋山又吉、戸塚音右衛門、戸塚伝七、松下佐七、大塚忠五郎、村井彦十、鈴木小平、伊藤助五郎、
彼等初期の努力に依って開拓の全体は375町歩に及んだ。

明治20年には間口21間の茶部屋を造り、茶揉衆20人、茶摘衆60人が泊まり込みで一番茶を行なっていた。機械式製茶が始まった明治33年（1900）堀之内高林式製茶機の第一号の購入者は杉本権蔵であったと云う。

明治7年（1874）には、開拓の目途が一応付き、権蔵は名前も「起利」と号して国利民福を起こすと云う信念で「目的は立てた時実行に移せ」と云う、彼の強い信念のキャッチフレーズに依って実行力のある開拓事業は一歩進んだ。が開拓の困難さや離農する人夫を見るに付け彼は開拓地に「清浄峰神社」を建て、「天照皇大神・金谷巖室神社の木花咲耶姫命・八坂八幡宮の応神天皇」の三柱を勧進して祀り神力のご加護を受け、地域の発展を願う事にした。また権蔵は創意工夫も素晴らしく、「権蔵わらじ」と云う大井川川越人夫や海岸、河で働く人々に重宝がられた「草鞋」も創作している。足と鼻緒の間に入った石や砂を簡単に流し出せる構造で、普通のわらじの横のちちを外して直接底に通し、後ちちを大きくして足首の前で結ぶ仕組みでのものを考案している。

この様に剛毅で力強く開発に成功した杉本権蔵も、老年に成るに従い母に苦勞を掛けた事がぬぐい切れず、母を伴い四国霊場を廻れなかった事を悔やみ、66歳になった時剃髪し法

衣を纏い、母親の遺骨を負櫃に背負って、西国並びに四国霊地を廻り、生前の供養をしたいと願出て、明治 26 年（1893）12 月 10 日に出立している。そして四国巡礼の念願も叶ったので、新道の菊川字上の山 504 番地に「巡礼完了記念碑」を明治 32 年（1899）春彼岸に建立し、踏み石の下には四国西国諸霊場から収拾した土を埋め、信拝者には四国西国巡礼の功德を実感させようと霊地を造った。

杉本良は後に曰く、祖父権蔵は「中山の精か地霊に祖父権蔵も呼び迎えられ、此処に一心不乱に身命を捧げ尽くしたのだ」と「御林百年」に記している。

小夜中山新道の開発

そして杉本権蔵の今一つのヒラメキは「小夜中山新道」の開発計画であった。権蔵は小夜中山の峻嶒な地形から、山越えの難所よりも谷越えの安楽走行の発想の転換を図った。東海道も山越えの急な登坂よりも、谷の低地を辿れば楽に歩けると同時に、大八車の時代には広い道路の必要が生まれる。一車千里を走る馬車道路時代に入った事を直観し、若いころ静岡行きの途中で、宇津の谷峠越えで苦労した道路のキラメキから改善を計画した。こうして杉本権蔵の「小夜中山新道開発計画」が進められた。

この開発計画は莫大の経費を伴うために経費の捻出計画を立てた。まず静岡片羽町の富豪伏見忠七、並びに忠左衛門に狙いを定め話を持ち掛けた。伏見忠左衛門の妻は金谷宿福一楼の近くに在った足袋屋の娘であった。静岡の伏見屋は金谷の浅井家で働いていた時代に商売上の知り合いであり、伏見屋のご内儀は同じ金谷宿の出身である所から、事業資金援助の話は目出度く成功した。出資金の比率は杉本権蔵が 5 分 5 厘、伏見屋忠七が 4 分 5 厘であった。

上記の確約は纏まって、明治 11 年（1878）12 月 15 日静岡県に計画書と共に出願した。新道開発費 25、000 円は杉本権蔵、伏見忠七負担。不足金 7、000 円は県補助金。資金返済 31 ケ年賦、有料道路として通行料を徴収し返済に充てると云うものであった。

静岡県は早速調査に入り、明治12年8月4日旅客貨物輸送の便宜を図る内務卿伊藤博文、太政官（大臣）三条実美に受領された。伺いの儀は次の通りであった。

中山峠新道開鑿之儀二付伺

静岡県管下東海道金谷駅口坂駅ノ間中山峠之儀ハ從來險路ニシテ行旅人民難涉不尠候趣之処、今般有志之者有之、新道開鑿築造入費償却之儀共、別紙之通申出候処、右ハ前後宿駅へ諸車之運搬相通シ一般公益ノ事業ニシテ、故障モ無之開鑿費ノ内七千円拝借、三拾一ケ年間道錢取請貸下金ハ年賦上納之積申立候得共、右ハ東海道筋ニシテ旅客ハ勿論諸物運搬不尠、道錢等ハ可成丈ケ年限取縮メ収入候方衆庶人民ノ為可然被存候ニ付、願人資金ノミ償却之積為取計候得ハ、十二ケ年以内ニテ償却相済候付、特別之訳ヲ以十二年度土木費ノ内繰合セ、此度限り右金員給与候様致度指令案相副此段相伺候也。

明治一二年八月四日

内務卿	伊藤博文
太政大臣	三条実美殿

右の結果、書面の通り聞き届けられ、金 7,000 円が下賜され、道銭取り立て償却する様に 9 月 4 日通行料 12 年間に短縮されて正式認可にこぎ着けた。

明治12年(1879)10月15日、日坂側より着工され、6,7キロには橋20箇所、道幅4間(7,2米)鶴ハシとモッコウに依る手作業工事であった。実質工事が始まって見ると、当初の計画より物価は3、6倍にもなっていた。人夫15銭が20銭に、石工は20銭が25銭、大工24銭が35銭に、橋梁木材1本1円42銭が2円50銭、道路敷買上げ田一反歩90円が179円、畑1反歩40円が80円以上に高騰のあおりを喰らってしまった。その他工事中に切割の側面の崩落や思わぬ出費もかさんで、工事費総額32,141円、助成金7,000円。差引25,141円が發起人の負担となってしまった。こうして明治13年5月30日ようやく小夜中山新道の完成を見る事が出来た。

開通式は明治13年(1880)6月1日、金谷宿坂町新道入口に大きな緑のアーチを造り挙行された。渡り初めには静岡県令石黒書記官、並びに関口郡長等多数の官憲を迎えて盛大に挙行された。金谷巖室神社の神輿を先頭に千羽鶴を仕掛けた祝砲を揚げ、20台の人力車に紅白の旗を押し立てて出発した。日坂口には9時に到着、日坂口にも又同様の緑のアーチで飾られて、鞠提灯100丁が掲げられ、古宮の翁と姥の成瀬半五郎80才と妻千代75才が、白布に高砂を描いた半天を着て、紅白の旗を立て、投げ餅を積み込んで、県令等と合流をして金谷の開業式場へ向かう。途中小泉屋忠六郎宅にては静岡伏見忠右衛門等が静岡より芸妓連を娘に仕立て、皆をアッと云わせた。11時より金谷で開通式が盛大に催された。県令よりは開通の祝文が寄せられ「一車千里の文明開化の天下の車道が完成したと祝言を述べ、この快挙は杉本権蔵、並び伏見忠七両氏の尽力なくしては万世に伝わらん」と絶賛をした。そして振舞酒と昼夜を分かたず花火も打ち上げられて一日中賑わった。

最初の有料道路と道銭場

こうして「小夜中山新道」は、全国最初の有料道路ではないかと云われ、明治13年(1880)五月より金谷坂町田中平蔵宅前で、14年1月よりは小夜鹿の仲田妻平宅前で料金の徴収が始められた。

「新道開鑿資金償却概要表」の通行料金

一、金一銭二厘	歩行者一人
一、金一銭八厘	空人力車
一、金二銭	牛馬一疋
一、金六厘	分荷一荷
一、金一銭	荷車一輛
一、金一銭二厘	指長持一棹
一、金三銭二厘	荷牛馬一疋
一、金五銭	空馬車一輛 馬丁共

右之通り

明治一三年五月 静岡県

予定では年収入1,845円16銭、26年目に資金の回収完了であった。

こうして小夜中山新道は時代の要求に依って完成した。東海道を通行する人々は有料ながらその恩恵を受けて順調に推移をして行った。しかしながら明治22年(1889)「東海道鉄道」

が開通すると、途端に東海道の往来は俄然減少して来た。資金返済の見込みも危うくなって来た。通行人は1日1,000人、荷車300台となり、民衆からは「なぜ天下の公道で道銭を取るのは何事か」との非難の声も挙がって来た。この善意の事業がピンチになって来た。

明治33年(1900)9月物価高騰もあり遂に経済的に維持が困難となって来た為に、「小夜中山新道献納願」を静岡県知事小野田寛熙へ提出する事にした。しかし国に無償提供を申し入れたが受け入れられず、収益8,992円47銭4厘、残り16,109円92銭6厘が未償却となった。明治35年(1902)7月県知事山田春三は、「道銭徴収の未償却保証金」として1,000円下附された。明治37年(1904)8月県告示220号を以て里道に編入されて、この一大事業は終焉を迎えた。

この様に明治維新以来地域の為に献身的努力を欲しなかった杉本権蔵は、先に述べた通り、老後は母の生存中に叶いをして上げられなかった西国33ヶ所の巡礼を発願し、剃髪して法衣を纏い母の遺骨を背負って巡礼をしたり。又権蔵は亡き母ふき女の56才当時の面影を、高王白衣観音と合わせて絹本に豊耕園藍山に依頼して描き、金谷宿金竜山洞善院に奉納している。

杉本権蔵は豪胆で任侠に富んだ人物であったから、明治維新で大井川川越制度の廃止に依り、生活に困った川越人夫を日坂御林の開拓に身を挺して面倒を見た。しかしその大半は途中で挫折した者も多く、自費で開拓の中心者となって働いた。

思えば牧之原の開拓に200人の川越人夫を引連れて入植した仲田源蔵も、旧幕臣の入植した武士団の嫌がらせによって、開拓の妨害をされ痛い仕打ちに合い、開拓に入った川越人夫も多数脱落者を出した。仲田源蔵も最後は幕臣への反発もあり、幕府の禁制であったヤソ教に入信し、心の安らぎを求めた。また其の武士団の代表者大草重高も同様に嶮しい開拓の仕事に付いて来れず脱落し逃亡する者も出て、武士団を引き留める工作として牧之原に「東照宮」を建立し引き留めを計った。

この様に先頭に立って数多くの部下人民の幸福を願い、崩れ雇う彼等の為にと献身的努力をした指導者達であった。しかし牧之原武士開拓団の大草重高も、大井川の川越人夫を引連れて牧之原開拓に入った人夫頭の仲田源蔵も、川越人夫を引連れ御林の開拓に入った杉本権蔵も、最後は神仏に頼らざるを得なかった。その苦難の心情やご苦労に対して、この開拓事業が、如何に艱難辛苦を伴うもので有ったかが推察され、ここに感謝の誠を捧げたい。

そして今、日本を代表する牧之原大茶園は全国一の優良茶の生産地となり、品質の上で日本一を競う日坂御林の大茶園は、彼等の偉大なる功績に依って今日がある事を、改めて再認識したいと思います。

更に杉本権蔵の行った「小夜中山新道」は、昭和6年(1931)昭和大恐慌の大不況の中で職を失った人々、並びに俗に云う「ぶらんさん」と云う東海道を往来する無職者を救済する為に「政府失業救済事業」が起こり国道改修工事が行われた。「小夜中山新道」もその中の一事業である。時代に即応した幅広い自動車道路の開発が必要となり、地元民を優先して採用し着工された。完成した新国道を見るに杉本権蔵等が明治11年(1878)に測量したコースと殆んど同じ事から、技術的にも高く評価された。